

# 序文

## 完成された作品

ギー・ドゥボールとは誰だったのか？ 20世紀の最後の革命家の一人であり、過去数十年間に物を考え、物を書いた者たちの中で自らの時代の社会を激しく——しかもよく事情を心得て——拒否した稀有な者の一人だ。彼はその社会をあるがままの姿で、むしろ醜く描き、そしてそれをそのように見たのだが、それは彼が一時代の無慈悲なモラリストとしてその社会を拒否していたがゆえにであった。ドゥボールは、その時代の無垢と善意と幻想を失くさせてしまったのだ。ヘーゲル、若きマルクス、そして、そのマルクスの最も鋭い注釈者の幾人かに依拠したドゥボールの「スペクタクルの社会」——この言葉は彼のものだが、しばしば皮相な使われ方をしている——についての分析は必要不可欠なものとなった。それらの分析には、反論の余地のない何か、今、振り返ってみても予言的な何かが含まれている。

だが、ドゥボールは理論家であることに満足しきしなかった。行動の人間である彼は、彼の時代の前衛アヴァンギャルドを（とりわけシチュアシオニスト・インターナショナルとともに）再発明し、それから、革命的展望がかすんでしまった時にも、自由——絶対的であることを彼が常に望み、それについては決して妥協することのなかった自由——を保持することのできたごく限られた者の一人となった。この自由を用いて彼は戦いを行い、その作品を作り、彼の行動、著作、映画にたえずその自由を再投入した。彼は模範、より正確に言えば、反－模範だった。断念と妥協に取り憑かれた一時代に、ドゥボールは、その時代に立ち向かい、その時代と全面的な紛争状態の関係を結び続けることは覚悟の上で、別の仕方で思考し行動することが可能であることを示したのである。

ジャン＝ルイ・ランソンの綿密な作業によってまとめられたこの『全著作』〔*Euvres*〕の意味は次のようなものである。ギー・ドゥボールの軌跡にかかる行為=記録〔*actes*〕の全体——あるいはほぼ全体——を初めて一つにまとめたこと、ドゥボールがそれによって時代の敵になろうと欲した——現代ほど合意と順応主義の蔓延する時代にはすばらしい野心である——彼の行状の全体、いくつかの未発表のテクストだけでなく、時がたつにつれて見つけにくくなったりしたテクストや、絶版になったり、内輪のためだけに発表されたりしたテクストを数多く含む全体を集めた

## 序文

ことである。それは、言葉の慣習的な意味での全集以上のものであると同時に以下のものである。以上のものというのは、本書には、単なる作品だけでなく、数多くの資料——ビラ、宣言、書簡、論文、等々——が収められ、それらのものによつて、一つの生き方 [*art de vivre*] ——争議の、戦闘の、だが同時にゲームの技法=芸術——が倦むことなくきらめいているからだ。ドゥボールはこれらの技法=芸術を発明し、何人かの者たち、レトリストやシチュアシオニスト、さらに他のさまざまな仲間（最後まで、彼は孤独な人間とは正反対の人間だった）とそれを共有することができた。一方、以下のものというのも、それと同じ理由からであり、彼の作品は、その書物であるのと同じだけその生であり、その戦いであるからだ。ドゥボールは物を書き（そして、映画を作った）が、その数は多くはなく、ただ彼が必要と判断した時にだけそれを行い、とりわけそれを職業にはせず、いわんや、それを専門の活動や天職にはしなかった。彼の『全著作』は、それゆえ、ここに収められた作品が、作家であることも、映画作家であることも、学者であることも、いわんや「知識人」であることも、決して望まなかった一人の人間の作品であるという点で独自なものである。それは、絶対的反抗の状態に値するとは自分には見えなかつたものに対しては関心も尊敬も抱けなかつた人間の作品である。これらは、革命の欲望、革命を思考するための批判的道具、闘争の痕跡の記録文書だが、その闘争は長期にわたって集団で行われ、やがて、最後の数十年は次第に個人的な資格で行われた。

つまり、ドゥボールの『全著作』はこの成り行きで不均衡な諸作品として差し出されているが、それらは、すべてが結晶化するいくつもの決定的瞬間に彩られた数々の戦術的介入であるということだ。最初の書物——あのすばらしい『回想録』——が現れるには1958年を待たねばならないが、それは一部の者だけが知る「反書物」であり、1993年まで決して販売されることはなかつた。多くの者からドゥボールのほとんど唯一の主著だと見なされている『スペクタクルの社会』は、1967年に出版され、長い間、彼の作品の最も目を引く部分であり続けている。その後は、少しリズムが早くなり、書物と映画はより多く、しばしばより長くなつてゆく。しかしながら、主著と考えられる作品（『スペクタクルの社会』、『我々は夜に彷徨い歩き、そして火で焼き尽くされる』、『スペクタクルの社会についての注解』、『称讃辞』など）を、マイナーと考えられる作品や多数の論文、ドゥボールと彼の仲間が行った戦いを証言するビラや宣言と対立させたり、あるいは、「眞の」作品と習慣的に記録文書や資料の範疇に入れられるものとを区別しようとしたりすることは誤りだろう。というのは、少し大げさに言えば、そうした作品も記録文書化の行為、資料収集計画の中にまるごと収まると言うこともできるからだ。

ドゥボールには史料編纂官——彼自身と彼の周りの人間の——のようなところがあり、自分が生きたり体験したりすることのできたことを休みなく証言しようとして、次々と取つた立場の記録、行状の痕跡を増やしていくが、それはどこか自分

が参加した戦いを引き延ばし、繰り返すためであるかのようだった。闘うことは彼にとって常に自分の視線と自分の展望を世界に対してだけでなく彼がそこに介入するものが適當と判断したそのやり方に対しても押し付けることを意味した。闘うとは、最後の言葉を持つこと、すべてを言ってしまうこと、反論を許さないことを意味し、そして可能ならあらかじめ、言葉遣いに気をつけて、それをうまく書けることが特に求められるのである。ドゥボールの行動は一個の「事実のために、正確さのために、それが語られるために」（マラルメ〔『ディヴァガシオン』の一篇「葛藤」〕）集約されるが、本書がめざすその再構成のためにはすべてが語られなければならない。完成した作品になるには、ドゥボールに最後の言葉を、最後の言葉のすべてを任せなければならなかった。なぜなら、それらすべての言葉もまたそうであることの意図に貫かれているからだ。

この特性の例として、ドゥボールが彼の最初の映画六作品のテクストを出版する際（1978年）に、それらを収めた書物に『映画作品全集』の表題を付けた事実や、より一般的に、彼自身が自分の作品を常に完成された決定版となるようなやり方で組み立て、後で何も付け加えたり言い直したりする必要のないようにした事実に見られる措置を取り上げることができるだろう。そのほかにもそれを証言する多くの行為がある。『スペクタクルの社会』のイタリア語翻訳への序文は、その本の正しさが現実によって絶え間なく証明してきたために、句読点の一つさえ変更する必要はないということを堂々と挑むように確認している<sup>☆1</sup>。あるいは『映画「スペクタクルの社会」に関してこれまでになされた毀譽褒貶相半ばする全評価に対する反駁』のような映画は、そのタイトルが争点を明確に示している。さらに、反駁あるいは反駁不可能性というこの同じ原理が、後に『ジェラール・ルボヴィッジの暗殺に関する考察』や『称讃辞』、『「この悪しき評判……」』などの書物でも作用することになる。最初から最後まで、ドゥボールは常に出版する作品が完全版であることを求め、それらの作品によって、そのつどすべてが語られたが、たいていの場合、その語り方は新たなものだった（反復もまた一つの技法である）。

本書の編集方針はそれゆえ、標準的な文学的モニュメントをめざして不要なものを除去したり、各作品を再構成したりすることによって進められるよりもむしろ、ドゥボールが彼の時代に対して起こすことを自らの任務とした訴訟のあらゆる証拠物件をできれば再現することにある。そして、年代順にそれを再現することは、ドゥボールの場合ほど作品と一致することはおそらくこれまで一度もなかつたであろう冒險を、ほとんど日を追ってたどることを可能にする唯一のやり方である（それは、一時期、シチュアシオニスト・インターナショナルに具現した芸術の乗り越えの意志にも従つたやり方である）。それゆえ、本書は、すべてを考慮に入れることはせず、ドゥボールという人間に代わって物事を決しようともしなかった。20歳の時から芸術は死んだととにかく考え、人生の最後までこの確認を固く守り通した彼は、裁判にかけられたスペインの絶対自由主義者を支援する声明を執筆すること

に、すばらしい本を書くことと同じ——より大きなとは言わないまでも——重要性を与えたのである。

読者がドゥボールの世界に入り、自分が深く感じる確信あるいは完全性の輝きの大きさを認識できるようにするために、その世界の全体的な論理を再現しなければならなかった。つまり、その中ではあらゆるものが互いに関係している一つの世界が木霊とともに浮かび上がってくるように、ドゥボールの最も濃厚な時期を、より希薄な数々の時期が訪れてそれに応えあるいはそれを保証する文脈の中に位置づけなければならなかったということである。どこにドゥボールを探すべきなのだろうか？確かに、ドゥボールは『スペクタクルの社会』や『称讃辞』<sup>バネジック</sup>の中にいるが、レトリストのビラやシャン・リーブル出版社の『書簡集』の序文の中にも彼はある。ここにもあそこにもいるのであり、あそこにいるがゆえにここにいるのである。本書『全著作』によって、これからは、一つの行程の一貫性と、とりわけその一貫性の美をも測ることがはるかに容易になるだろう。ドゥボールとは、詩法にまで高められた自己自身への忠実さであり、たえず更新され、再発明され、再び賭けられ、再び形を与えられる自由の意志である。

レトリストの時代から、すべてが素早く過ぎ、ビラから本へ、宣言から映画へ、<sup>マガジン</sup><sup>マイナード</sup>「大きな」作品から「小さな」作品へと、螺旋状に繰り返され、洗練され、深まつてゆく。1953年にセーヌ通りの壁に書かれた「決して働くな」——皮肉な誇りを込めてドゥボールが常にその作者であると主張した「作品」<sup>☆2</sup>——に、彼が生前に準備していた最後の書物である1995年の『契約』が応える。だが、それは書物なのか？その内容は、ドゥボールが友人のジェラール・ルボヴィッシ<sup>★1</sup>との間に交わした彼の映画についての三つの契約であり、それらの契約はドゥボールの側が有利になるように完全にバランスを欠いたものだった。契約というよりむしろ白紙の小切手の贈与であり、それによって、ドゥボールが約束を守り、決して働くないという彼の誓いに忠実でいることができた<sup>☆3</sup>。1953年の落書きもルボヴィッシと交した契約も、普通の意味での作品ではない。にもかかわらず、どちらもドゥボールの芸術の中心にあり、『称讃辞』<sup>バネジック</sup>や『スペクタクルの社会』、さらには15年間のシチュアシオニストの冒險と同じことを語っているのである。

確かに、芸術的真剣さにおける進歩はかなりゆっくりとしたものだが、社会的芸術的ストライキの中においては、結局のところ、常に変わらぬものが多くある。本書の利点は、どのようにドゥボールが冒険を変え、どのように彼が常に同じままであったかを示すこと、どのようにしてレトリストの青年期がその後のすべて、とりわけシチュアシオニストの経験の搖籃期であったか、そしてどのように晩年の欠如した思慮分別がレトリストの黄金時代を確認し、取り戻すものとなつたかを示すこと。あるいはさらに、どのようにして、シチュアシオニストのテーゼへの忠実さゆえに、それらのテーゼがそれでも具体化したシチュアシオニスト・インターナショナルの解散をせざるを得なくなつたかを示すことである。それはまた、今日、ある

者たちが両立不可能であると思いたがっている理論家と作家の間でどちらかを選ぶ必要はないということ、理論家も作家も同じ戦いを交えたということ、理論的言説も自己描写も、ドゥボールがそのすべてを拒否した社会に投げつけられた同じ挑戦の性質を帯びているということを示すことである。そしてそれはまた、それ以外の介入<sup>アンテルヴァーション</sup>にもあてはまり、それらはすべて同じ、特異な立場に収斂する。今日、自分の責任でその立場を要求しうる者はまれである。

## 体験から伝説へ

反逆の趣味は常にそこにあったようである。そのおかげで、まだ青年期のドゥボールは、ダダイスト、シュルレアリスト、ロートレアモン、さらには、脱走者にして原ダダイストのボクサー詩人アルチュール・クラヴァン<sup>★2</sup>を称讃するようになる。  
 プロト  
 アヴァンギャルド  
 すべては前衛とともに、詩とともに始まるのであり、——今日、ドゥボールについてある者たちが持っているしばしばもっぱら「政治的な」イメージを考えると、そのことに注意を促すことは無駄ではない。しかし、一挙に、この青年にとって、重要なことは芸術を乗り越えること、すなわち、生を反逆と一致させるという条件で、芸術を生と一致させることになるだろう。日常生活が可能な限り日常的なものではないようにするために、詩を日常生活に奉仕させねばならない。前衛<sup>アヴァンギャルド</sup>とは、繰り返すためではなく通過するためのものである。そこにこそ、ドゥボールがイジドール・イズー<sup>★3</sup>のレトリストたち（イズーの「レトリスム」は本質的に第一次大戦後のダダイズムのリメイクである）と出会ったかと思うとすぐに袂を分かったことの意味のすべてがある。レトリスムのプログラムへの彼の束の間の参加は、すぐさま他の冒険に彼を投げ出す発射台のようなものである。

例えば、レトリスト・インターナショナルの冒険（1952-1957年）は、その集団の名称だけでも皮肉の混じった誇大妄想的なスタイルを象徴的に示しているが、そのスタイルは彼らと関係するすべての宣言と声明に再び見出される。レトリスト・インターナショナルはもはや本当にレトリストではなく、ごくわずかしかインターナショナルでもない。最も多い時で10名程度の若者から構成され、その全員が多かれ少なかれ不良であったこの集団は、無為（「決して働くな」）の専門家であり、高名な前衛<sup>アヴァンギャルド</sup>と知識人をできる限り侮辱的に批判することを得意としていた。ゲームの趣味、衝突の趣味である。ドゥボールと彼の仲間が最初の戦争を行い、その機会に、より英雄的でより伝説的な別の生活を手に入れるのは、サン=ジエルマン [=デ=ブレ] でのことである。それに続いて、他のいくつもの冒険、他のいくつもの戦争があり、そのうち最もよく知られたもの、シチュアシオニスト・インターナショナルの<sup>しるし</sup>下に置かれた戦争は、〈68年5月〉のあたりでほぼ現実のものとなる。